

熊本市生物多様性戦略

～いきもん つながる くまもと  プラン～

熊本市

Cは City：自然豊かな都市だからこそ

Cは Conservation：保全します

Cは Challenge：挑戦します

Cは Cooperation：みんなの力で、連携し、協働して

自然のめぐみに感謝し、人と自然がともに生きるまち、くまもとへ

熊本市生物多様性戦略の策定にあたって

このたび、熊本市は、生物多様性の保全と持続可能な利用に向けた基本的かつ総合的な計画として、「熊本市生物多様性戦略 ～いきもん つながる くまもと Cプラン～」を策定しました。

生物多様性の保全と持続可能な利用に向けては、国や県も戦略を策定していますが、自然環境や社会・経済の状況は地域によって様々であり、地域ごとにその実情に即した取組を進めることの重要性が強調されているところです。このような中、出来上がった本戦略は、熊本県内の市町村として最初の生物多様性地域戦略です。その策定にあたりましては、私たちのまち、熊本市がいかに自然環境に恵まれ、そのめぐみに暮らしが支えられているのか、そして、その豊かな自然が本市の魅力であることを、もう一度見直すところから始めました。そして、生物多様性について、単に素晴らしい自然があるだけでなく、地域固有の資源であるという視点に立ち、現状と課題を整理するとともに、約 35 年後の 2050 年にあるべき望ましい姿を提示し、その実現に向けた基本戦略をとりまとめた次第です。

今後は、本戦略のもと、近隣の市町村などとも連携し、率先して、地域の資源である生物多様性を守り、活かす取組を進めていきます。そして、この取組は本市の目指す、ずっと住み続けたい、誰もが住んでみたくなる、そして訪れたいとなる、「上質な生活都市」の実現を支えるものです。

そのためには、市民の皆さまと行政が一緒に地域を見つめなおし、将来を描き、手を携え、行動していくことが不可欠です。熊本市における生物多様性の取組は始まったばかりです。「自然のめぐみに感謝し、人と自然がともに生きるまち、くまもと」をみんなの力で実現させましょう。



平成 28 年 3 月
熊本市長 大西 一史

熊本市生物多様性戦略 ～いきもんつながるくまもとプラン～ の体系

前文

第1章 目的・位置づけ等

目的: 生物多様性を保全し、将来にわたってそのめぐみを受け続けていくことに向けた、熊本市の全ての主体の行動の指針となる基本的な計画
人と自然が共生し、魅力と活力ある社会の構築を目指して、市民一人ひとりの行動と連携・協働を推進する

対象期間: 2020年(長期的には2050年の望ましい姿を見据える)

対象地域: 熊本市全域及び隣接する海域(必要に応じて広域的な対応を図る)

第2章 策定の背景

- ・生物多様性とは？—3つのレベルの多様性、「個性(違い)」と「つながり」
- ・生物多様性の危機—4つの危機

- ・生物多様性のめぐみ(生態系サービス)に支えられる私たちの暮らし
- ・生物多様性をめぐる世界・日本・熊本市の動き

第3章 熊本市の生物多様性の現状と課題

1. 自然環境の特徴: 有明海と阿蘇、九州中央山地の間に位置し、河川などでつながるめぐみ豊かな地域。自然と人の営みに育まれる豊かな地下水。

2. 生物多様性の特徴:

土地利用の変遷

東部地域への市街地の拡大

植生

二次林や人工林・農地等を中心とする植生、河川部にはヨシ原など

動物・植物の特徴

湧水環境と干潟の豊かな生きものが特徴。市内の約1割が絶滅危惧種。外来種の侵入

6つの自然環境のタイプ

・里地里山 ・田園地域 ・市街地
・湧水地 ・河川 ・干潟

めぐみ ・暮らしや産業を支え、美しい景観と文化を育む豊かな地下水 ・なす、みかん、ひこ野菜など特色ある、全国屈指の農産物の産出 ・ノリ、アサリ、ハマグリなどの有明海のめぐみ

3. みんなで未来に残したい熊本市の自然環境

特に「生物多様性保全上重要」「市民に親しまれ、大切にされてきた」、次世代に残すため、市民みんなで連携して、重点的に取り組む6地域の現状と課題

金峰山系

立田山

雁回山
(木原山)

水前寺・
江津湖

有明海
(干潟)

白川・緑川

4. 各区の特徴(身近な自然を守る)

社寺林や地域で大切にされてきた湧水・水路・小川などの身近な自然。地域で関心を持ち、身近に守りたい自然と課題を各区ごとに整理

5. 課題

生物多様性の情報についての課題

- ・科学的な情報の不足により、現状・変遷の把握・評価ができない

生物多様性の認識や取組についての課題

- ・市民の生物多様性への認識が低く、取組が浸透しない
- ・各主体の連携不足

生きものの生息・生育環境についての課題

- ・市街地拡大、森林・農地等の開発による生息・生育地の減少
- ・竹林、人工林、ため池等の管理不足等による生息・生育地の環境の悪化
- ・外来種の侵入・分布拡大
- ・地下水(湧水量)の減少による、生息・生育地の環境の変化等

生物多様性の利活用についての課題

- ・生物多様性に関する魅力的な地域資源の利活用・情報発信の不足
- ・過剰採取等による資源量の減少等

第4章 この戦略を通して目指す熊本市の姿

基本理念

自然のめぐみに感謝し、人と自然がともに生きるまち、くまもとを、みんなで実現する

望ましい姿

2050年をイメージし、長期的な視点から熊本市が目指す姿として、基本理念が実現した理想的な姿を表現
市民一人ひとりが関心を持ち、理解し、暮らしの中で生物多様性を上手に利用しながら守る行動をしている姿、市内に水や緑のつながりが身近な自然とともにかたちづくられ、豊かな生きものが息つき、人と人、人と自然がつながりあい、いきいきとした暮らしが営まれている姿を記述

第5章 望ましい姿の実現に向けた基本戦略と行動計画

今後とるべき行動について5つの基本戦略を設定し、取組・施策の体系を整理

基本戦略

**基本戦略1
～知る～**

基礎となる情報の継続的な収集・整備

**基本戦略2
～学び、つながる～**

生物多様性の認識の向上、人材の育成、連携・協働体制の構築

**基本戦略3
～守る～**

生物の生息・生育地の保全

**基本戦略4
～創る～**

生物の生息・生育地(拠点)の創出、生態系ネットワークの向上

**基本戦略5
～活かす～**

めぐみの持続可能な利用

**計画期間中に達成すべき目標
(2020年)**

自然環境に関する情報が収集・整理され、関係者がアクセスすることができる環境が整っている。

生物多様性について、認知度が高まり、生物多様性や自然体験に関するイベントへの参加が増加している。

絶滅危惧種の保全や生きものの生息・生育環境の保全、外来種対策等について、緊急的な取組が実施されている。
効果的な対策の手法についての検討が進んでいる。
広域的な視点での具体的な取組が実施されている。

生きものの生息・生育地の創出にも寄与する緑地の取組が行われている。
効果的な緑地の創出・ネットワーク形成手法や整備・管理手法が検討されている。
生物多様性に配慮した整備が増加している。

「水」や「歴史・文化」の視点と連携し、生物多様性が地域資源であることが認識され、地域の魅力が発掘され、活用する取組が実施されている。

2020年までの具体的な取組

1. 生物多様性に関する情報の収集・発信の体制構築
2. 生物多様性に関する情報の整理・分析
3. 自然環境に関するモニタリング調査の実施

1. 生物多様性の認識の向上
2. 教育の推進・人材の育成
3. 連携・協働体制の構築

1. 絶滅危惧種の保全
2. 多様な自然環境の保全
3. 外来種対策の実施
4. 広域的な視点での保全対策の実施
5. 環境負荷の低減を通じた保全対策の実施

1. 生きものの生息・生育地となる緑地の創出
2. 生物多様性に配慮した整備の推進

1. 生物多様性と地下水、歴史・文化を活かした魅力の発信
2. 生物多様性と地下水、歴史・文化を活かした地域づくりの推進
3. 生物多様性と地下水を活かした農林水産業の推進

各主体の基本的な役割

市: 情報の収集把握、情報発信
市民等: 身近な自然への関心を持つ、参加型モニタリングへの協力 等

市: 市民や学校での普及啓発、教育の推進
市民等: 観察会への参加、学習・理解 等

市: 保全の方針や仕組みの構築
市民等: 正しい理解に基づく適切な行動、保全の取組への参加 等

市: 生物多様性に配慮した緑地等の創出
市民: 庭や事業所の緑化等による生息・生育地の創出 等

市: 生物多様性などを活かした魅力の発信
市民: 地域づくりや事業活動の推進、生物多様性に配慮した農水産物を「えらぶ」 等

基本戦略ごとに市・市民・市民活動団体・事業者それぞれの役割を整理

第6章 推進体制・進捗管理

1. 推進体制

- ・市(環境共生課・博物館・動植物園・環境総合センターを核とする)が自然環境に関する情報の拠点となり、市、市民、市民活動団体、事業者等がそれぞれの役割を意識し、相互に連携・協力しながら、戦略を推進
- ・地元有識者や大学・研究機関、国・県・市町村等の行政機関とも連携
- ・これらの主体からなる「生物多様性推進会議」を設置
- ・庁内に「庁内推進会議」を設置

2. 進捗管理

- ・PDCAサイクルによる進捗管理を行い、年度ごとにその結果を公表(庁内推進会議・生物多様性推進会議においてチェックを行う)
- ・目標年次となる平成32年(2020年)には、進捗状況、課題を再評価し、次期戦略を検討

目次

前文	1
第1章 目的・位置づけ等	3
1.1 熊本市生物多様性戦略策定の目的	3
1.2 策定の基本視点	3
1.3 対象期間・対象地域	4
(1) 対象期間	4
(2) 対象地域	4
1.4 位置づけ	4
第2章 策定の背景	5
2.1 生物多様性とは？	5
2.2 私たちの暮らしと生物多様性	7
(1) 基盤サービス	8
(2) 供給サービス	8
(3) 文化的サービス	8
(4) 調整サービス	9
2.3 生物多様性の危機	11
2.4 生物多様性をめぐる世界・日本・熊本市の動き	16
(1) 世界	16
(2) 日本	16
(3) 熊本市	16
第3章 熊本市の生物多様性の現状と課題	21
3.1 熊本市の自然環境の特徴	21
(1) 位置と周辺地域とのつながり	21
(2) 四季と気候の特徴	23
(3) 地形・地質の特徴	27
(4) 豊富な地下水の秘密	33
3.2 熊本市の生物多様性の特徴	35
(1) 土地利用の変遷	35
(2) 植生	37
(3) 動物・植物の特徴	42
(4) 自然環境のタイプごとの生物多様性	45
(5) 生物多様性のめぐみ	53
3.3 みんなで未来に残したい熊本市の自然環境	65
(1) 金峰山系	67
(2) 立田山	69
(3) 雁回山（木原山）	73
(4) 水前寺・江津湖	75
(5) 白川・緑川	77
(6) 有明海（干潟）	79

3.4 各区の特徴（身近な自然を守る）	81
(1) 中央区	83
(2) 東区	85
(3) 西区	87
(4) 南区	89
(5) 北区	91
3.5 熊本市の生物多様性の現状と課題（まとめ）	93
(1) 現状	93
(2) 課題	94
第4章 この戦略を通して目指す熊本市の姿	97
4.1 基本理念	97
4.2 熊本市が目指す2050年の望ましい姿	98
(1) 市全域	98
(2) みんなで未来に残したい熊本市の自然環境	99
第5章 望ましい姿の実現に向けた基本戦略と行動計画	102
5.1 基本戦略と行動計画の概要	102
5.2 基本戦略1：知る（基盤となる情報の継続的な収集・整備）	106
(1) 戦略の基本方向	106
(2) 行動計画	106
5.3 基本戦略2：学び、つながる（生物多様性の認識の向上、人材の育成、連携・協働体制の構築）	110
(1) 戦略の基本方向	110
(2) 行動計画	110
5.4 基本戦略3：守る（生物の生息・生育地の保全）	116
(1) 戦略の基本方向	116
(2) 行動計画	116
5.5 基本戦略4：創る（生物の生息・生育地（拠点）の創出、生態系ネットワークの向上）	124
(1) 戦略の基本方向	124
(2) 行動計画	124
5.6 基本戦略5：活かす（めぐみの持続可能な利用）	130
(1) 戦略の基本方向	130
(2) 行動計画	130
第6章 推進体制と進行管理	136
6.1 推進体制	136
6.2 進行管理	138
◆ 用語解説	139

コラム 1	暮らしの中に息づく生物多様性.....	10
コラム 2	人の手が加わって維持されてきた自然もある.....	13
コラム 3	外国からやってきた生きものだけが外来種じゃない?!.....	14
コラム 4	ティッピングポイント ～後戻りできなくなる瀬戸際?!～.....	15
コラム 5	ミレニアム生態系評価.....	17
コラム 6	愛知目標.....	19
コラム 7	生物多様性基本法と生物多様性国家戦略.....	19
コラム 8	県と市町村の役割分担と連携 ～熊本市の戦略に期待されること～..	20
コラム 9	市街地にホタルが舞う.....	25
コラム 10	大きく変化した熊本市の自然環境.....	26
コラム 11	江津湖の昔ばなし.....	32
コラム 12	「緑のオアシス」立田山の生物多様性 ～野生動物の視点から～....	52
コラム 13	熊本水遺産巡り.....	55
コラム 14	ひご野菜.....	59
コラム 15	「なくなる危機」を救った市民の愛 ～立田山の緑～.....	71
コラム 16	知っていますか？金峰山系の生物多様性！.....	108
コラム 17	いのちのリレーを学ぶ、思いやりの気持ちが出発点 ～学校緑化コンク ール～	113
コラム 18	トラスト運動で守った「地域の宝」タブノキ.....	114
コラム 19	竹林整備の取組を広げよう ～みずあかり～.....	120
コラム 20	釣りで外来魚駆除？ ～江津湖、新たな取組のスタート～.....	121
コラム 21	農村地域の底力 ～自分たちができる身近な活動～.....	122
コラム 22	アフリカゾウと阿蘇の草原の深い関係 ～動植物園から考える熊本の生 物多様性～	123
コラム 23	生物多様性に配慮した法面緑化に向けて.....	126
コラム 24	鶯川における多自然川づくりの取組.....	127
コラム 25	緑化市民運動 ～地域住民による「ホタルが棲める公園づくり」～..	128
コラム 26	生物多様性に配慮した事業緑地.....	129
コラム 27	大井手の楽校 ～地域で取り組む歴史遺産に目を向ける活動～.....	132
コラム 28	もっと！歩く観光へ ～地域の自然の魅力を活かして～.....	133
コラム 29	ハチミツづくりと田んぼづくりの関係 ～企業の事例～.....	134

前文

生物多様性という言葉を知っていますか？

熊本市で、この問いかけに「意味を知っている」と答えた人はわずか13.8%（平成26年度）しかいません。

地球上には、未知のものも含めると約3,000万種とも推定される多様な生きものがあります。この生きものたちは、食べたり食べられたりするように、虫が花粉を運ぶことで植物は受粉して実をつけるように、生きものの死がいや微生物が分解して豊かな土壌ができるように、様々な関係で互いに網目のようにつながりあっています。

こうしたつながりと、地形や気候など様々な条件が重なって、森林や草原、川や湖、海洋、干潟など多様な生態系が形づくられています。私たち人間も含め、全ての生きものが生態系の一員としてこの中で生きています。そして、水田のような、人間の営みがあって成り立ってきた生態系もあるのです。

こうした、様々なつながりと相互の働きがあって、酸素の供給など、人間も含めた全ての生命が生きる基盤が整えられています。また、私たちが食べているものは全て生きものです。健全な生態系は、食料や安全な飲み水の確保には欠かせません。また、私たちは、豊かな自然とふれあうことで心の安らぎを得ることもあります。

こうした自然や生きもののつながりは、長い歴史の中で培われてきたものです。そして、地域それぞれに独特の姿が形づくられ、多様な文化が育まれたのです。

熊本市の自然の姿はどうでしょうか。

阿蘇の草原や九州中央山地の森に降った雨は、川となって市内の田んぼや畑を潤し、海の生きものが生きていくのに必要な栄養などを海に運びます。あるいは地面に浸透して、熊本市の財産でもある地下水となり、私たちの暮らしを支えています。そして、熊本市が面している有明海は、日本一の干潟面積と干満差を有しています。川が運んだ栄養分は海を豊かにし、アサリやハマグリ、ノリといった熊本市が誇る海の幸が育まれます。

また、市街地にも、水前寺・江津湖に代表されるような豊かな水辺があり、寺社や辻には、かつての「森の都」をしのばせる大木や、小さな湧水地などが今も地域の人々に大切にされています。金峰山系周辺や市北部などには丘陵地や水辺が入り組んだ中に里地里山の風景が残されています。

こうした自然と熊本に暮らす人の営みの中で、郷土料理やお酒、豊かな実りを願い・祝う祭事、自然の風景を詠みこんだ詩なども育まれてきました。

ところが、今、世界的にかつてないスピードで生物の絶滅が進行しているなど、人間活動を原因とする生物多様性の損失が深刻な問題となっています。それは日本でも、そして、熊本市でも例外ではありません。

あなたが子どもの頃、普通に見ることができた生きものがいなくなっているいませんか？身近にあった林や田んぼがなくなっているいませんか？

その影響は、今すぐ、暮らしに大きく現れることはないかもしれませんが、しかし、小さなヒビでは壊れず補修できた建物が、無数のヒビや割れ目が入り続けると崩壊するように、生物多様性も損失が続けば、取り返しがつかなくなることが起こります。そして、それは将来に重大な影響を与えることになるかも知れないのです。

未来の私たち、それから、私たちの子どもや孫たちも、自然からのめぐみを受けて、安心して豊かな暮らしを送ることができるようにと願うならば、私たちは、今、行動を起こさなければなりません。

生物多様性とは何でしょうか。

私たちの暮らしを支えている、そして、その地域固有の魅力・財産として、不可欠なものといえます。

こうした生物多様性と私たちの関係を改めて認識し、熊本市のかけがえのない財産を将来の世代に引き継いでいくために、今、市民全員の知恵と想像力で未来の姿を描き、取り組んでいく。この熊本市生物多様性戦略は、その一歩となるものです。